

Title	東インド会社とネイボップ
Author(s)	浅田, 實
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39610
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名	あさ だ 浅 田 實
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 2 1 1 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 7 年 1 0 月 1 7 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 名	東 インド 会 社 と ネイ ボ ッ プ
論 文 審 査 委 員	(主 査) 教 授 川 北 稔 (副 査) 教 授 合 阪 學 助 教 授 江 川 温

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、17 - 19世紀東インド会社時代のイギリスとインドの関係を、自由商人の活動を中心に分析し、あわせてイギリス人のインド観の変化を追求することを目的とした考察である。全体は三部にわけられているが、400字詰原稿用紙に換算して1000枚余の大作である。

まず、序章においては、本論文の史学史的な位置と、全体としての意図が語られる。すなわち、戦後、一つには、ひたすらイギリス資本主義発達史の観点からのみ、しかも、いささか理論過剰気味に議論されてきたイギリス・インド関係を、当時のヨーロッパ国際関係のなかでのイギリス東インド会社の活動の意味や、直接取引に当たった人びと、とくに自由商人の実態を描くことで、より具体的に分析し、意味付けようとするものである。それと同時に、「ネイポップ」、すなわちインドから巨万の富をえて帰国した人びとに対するイギリス本国社会の対応の変化のなかに、帝国主義的なメンタリテの萌芽をみようとするのが、本論文のもうひとつの主要な意図となっている。

第一部「東インド会社と自由商人」は、5章からなり、インドにおける会社と自由商人の相克をヨーロッパの国際関係との関連で論じている。

第一章「イギリス・オランダ戦争期のコロマンデル海岸」は、17世紀後半の三度にわたるイギリス・オランダ戦争が、アジアにおける英・仏・蘭三国の拠点争奪戦と連動していたことを析出。とくに綿布の特産地としてのコロマンデル海岸の拠点をめぐる三国の抗争に、第三次イギリス・オランダ戦争が仮りの結論をもたらし、プラッシーの戦いに至る英・仏対立の枠組みを確立したことが明らかにされた。第二章『『アジアの海』の英人自由商人』は、東インド会社の規制と統制の枠外で活動した自由商人たちをとりあげ、彼らの行動のなかに、大英帝国形成の先兵の役割をみるとともに、当時のイギリスで激しい非難の対象となった「ネイポップ」は、主として、彼らの中から生まれたと主張する。自由商人についてのまとまった研究は、従来皆無であり、本章の研究史上の意義は大きい。かねて、「基幹貿易」たるアジア・ヨーロッパ間貿易に比べて、アジア内貿易（いわゆるローカル・トレード）が圧倒的に高い利潤をあげたことや、プラッシー以後は、領域支配にかかわる利益が大きかったことは、しばしば指摘されているが、そのアジア内貿易の大半は自由商人によって担われた、と本章は主張する。

第三章「ベンガル革命と英人自由商人」は、東インド会社のいわゆる「独占」は、国際的な意味でも、またイギリス人に限っても、自由商人の活動する現地では、まったく成立していないことを説明したうえで、自由商人による塩などの現地取引や現地支配者からの「プレゼント」による収入などの具体相を分析する。こうした収入源は、会社の収入をもふやし、とくに、ブラッシーの戦いによる「ベンガル革命」以後、会社の財政的自立をもたらしたことを明らかにする。「プレゼント」の問題については、近年は人類学の贈与論を応用した研究が盛んであるが、本章では、むしろP・J・ケインとA・G・ホプキンスの「ジェントルマン資本主義」論の財政史的視角が取り入れられている。

第四章「アダム・スミスとベンガル自由商人」では、東インド会社の批判者とされるアダム・スミスについて、いわゆる前期的商業資本と産業資本の対抗関係としてこれをとらえる通説がまったく当たらないことを、基本史料に立ち戻って主張し、スミスの依拠したW・ボルツが、会社と対立した典型的な自由商人であったとはいえ、がんらい会社内の派閥争いに敗れた、会社と同じ経済的背景をもつ「商人」にすぎず、そこにかつての通説が主張した資本範疇の相違などはありえないことを解明している。今後の展開によっては、アダム・スミスそのものの理解にも、微妙な影響を与えうる分析である。第五章「一八世紀後半の国際情勢と自由商人」は、ボルツを実例として、イギリス・オランダ戦争の時代とはまったく様変わりしたヨーロッパにおける国際関係が、自由商人の動向にいかなる影響を与えたかを分析し、前章の主張をさらに補強、発展させている。すなわち、東インド会社の派閥抗争に敗れて自由商人となったボルツは、折からアジアへの進出をめざしたマリア・テレジアのもとに、1776年、オーストリアの会社の指導者となる。ボルツの著『インド問題についての諸考察』は、このような経過のなかで書かれたものであり、そこで主張されている自由貿易論は、産業資本を背景とするようなものではありえない。ブラッシー以後も、現地ではイギリスによる独占が確立していたわけではない、と本論文はいう。

四つの章からなる第二部「茶・キャラコの輸入と需要」は、モノの輸入をつうじて、アジアがイギリス社会に与えた影響の分析をめざしたものである。

まず、第一章「東インド会社のコーヒー・茶貿易」は、イギリスにおけるコーヒーと茶の消費の普及と、英・仏・蘭・オーストリアなどによるそれらの商品の輸入について、基礎的な事実を分析している。ここでも会社主導とはいえ、対中国貿易の開拓などに、自由商人が果たした役割が強調されている。第二章「S・ピースとキャラコ熱」は、17世紀後半から18世紀初頭の史料を基礎に、キャラコ・ブームを取り上げている。つづく第三章「輸入キャラコの需要」は、いわゆるキャラコ禁止二法の効果について論じたのち、使用禁止法をかいくぐる国産模造品の出現を論じたうえで、第四章「18世紀末英国の木綿需要」で、この輸入代替過程が、ランカシアに綿工業を展開させ、いわゆる産業革命につながっていくと主張する。

「ネイボップたち」と題する第三部は、本論文の白眉をなす部分であり、ブラッシー以後、および1790年代をそれぞれ転機とする、ベンガル地方の植民地化の進行と、本国における「インド成金」に対する評価の激変を分析する。それらは、イギリス人のインド観そのものの変化の反映であったことが説かれる。

第一章「東インド会社の変容」は、いわば一種の商社として、政治的・軍事的支配には関心のなかった東インド会社が、ブラッシーの戦いを契機として、インド現地の状況から領土支配に引き込まれていく過程を論じ、その結果、「ネイボップ」が大量に成立する条件が生まれたことを示唆する。第二章「一史料が語る『ネイボップ』たち」は、激しい批判に曝されはじめたネイボップたち、とくにクライヴの弁護をめざした同時代の一書を分析する。現地における社員の行動を規制した「ノース規制法」(1773年)が、むしろかえって悪質なネイボップを生んだとして、これを断罪し、「真性のネイボップ」と非難されるべき「似而非ネイボップ」を弁別したこの史料から、ネイボップのもつ善悪二面性を説明する。第三章「S・フットの『喜劇』とネイボップ」は、1772年にロンドンで初演されたフットの喜劇『ネイボップ』が、イギリス社会に圧倒的なネイボップ批判の渦を巻きおこした事情を解明し、登場人物をそれぞれ実在のネイボップに比定している。

第四章「『ネイボップ』とインド人との生活交流」は、現地のイギリス人が、とくにブラッシー以後、領土的支配にかかわり、ナワーブやザミンダールなど現地支配者との日常的交流が不可欠になっていくにつれて、彼らの生活文化への同化を余儀なくされ、それが本国人に違和感を抱かせたと主張する。逆に、1787年のコーンウォリス改革以後は、イン

ド文化に対して否定的な見方が主流となり、現地のイギリス人の姿勢も、交流から支配へ転換したが、この結果、本国におけるネイポップ批判も急速に消滅する、と主張する。第五章「ネイポップ時代イギリス人のインド理解」では、インド文化へのイギリス本国における理解が1790年代に決定的に変化し、それまでの肯定的な評価が姿を消したことが指摘されている。とくに、ヒन्दゥ教については、ごく初期には否定的な評価があったものの、知識の深化と啓蒙思想の影響によって、とくにエリート階層の信仰するそれについては、一神教としてきわめて高い評価を得るようになっていた。しかし、1790年代に到って、今度は全面的に否定されることになった。こうして、19世紀的なインド観・アジア観が成立したのである。第六章「ネイポップと帝国の形成」は、同じ転換を知識人の動向を中心に検討している。すなわち、インドに対等の文化的価値を認めていた本国人が、そのインドにおいて掠奪を働き、いかがわしい手法で資産をなした者として「ネイポップ」批判が展開されたこと、しかし、博物学的関心をもってアジアにわたる旅行者がふえ、庶民生活についての知識が増すにつれて評価が逆転、イギリス人による支配・指導を当然の責務とみなすようになったことなどが論じられている。

第七章「ネイポップ・東インド会社と木綿工業育成」は、J・プライスの著作とされる1783年のネイポップと東インド会社への批判に反論する一冊子を取り上げる。彼が、会社に原棉供給の役割を期待していることに注目し、産業資本と商業資本を対抗的にとらえることは不可能である、と主張する。さらに、第八章「ネイポップ時代の終焉」は、1795年のヘスティングス弾劾裁判の終結が、ネイポップ批判の完全消滅を意味したこと、後任のコーンウォリスは名誉あるジェントルマンとして遇され、次の世紀のインド官僚の先駆となったことを論じている。

最後に、「おわりに」において、簡潔な総括がなされている。

論文審査の結果の要旨

東インド会社時代のイギリス・インド関係の研究は、従来、わが国では、重要なテーマであるにもかかわらず、比較的等閑視されたままとなっており、大塚久雄の先駆的研究と、これも大塚の方法論を全面的に採用した西村孝夫の一連の著作、およびかなり視点の異なる松井透の研究などがあるだけである。本論文の核をなす「ネイポップ」にかんしてはなおさらであり、川北の予備的な研究以外には、いっさい存在しない。イギリス人のネイポップ研究は、J.M.HolzmanからP.J.Marshallまでそれなりに存在するが、本論文は、第三部第七章のように、独自の史料を用いて新しい総合的な見解を示しており、研究史に新しいページを開くものである。

本論文の核心は、1760年代から1790年代初頭までの激しい「ネイポップ」批判がひろがった理由と、それが急速に消滅し、むしろインド官僚こそが典型的ジェントルマンとさえみなされるようになる理由との解明にある。前者の問いへの解答を、東インド会社の貿易商社から領土支配の機構への移行に伴う、在印イギリス人の富裕化とその生活態度の「インド化」に求め、後者の問いには、1790年代の東インド会社にかんするコーンウォリス改革と、インド文化、よりひろくはアジア文化に対するイギリス人一般の態度の変化に求めたものといえる。このような観点は、資本範疇論に終始した西村はもとより、イギリス人の近年の著作にも、十分には展開されていない独自のものである。むしろ、東インド会社と自由商人を資本範疇の違いに結びつけようとする、いわゆる「戦後史学」の方法に対しては、全面的にこれを否定している。

別の表現をすれば、少なくともわが国の研究が、これまでひたすら貿易関係にのみ注意を傾けてきたのに対して、本論文はモノの交流をこえて、ヒトの移動と文化交流を俎上にのせたといえることができる。

同様に、帝国形成の理論の点でも、本論文は随所に「現地の事情」に対する言及がなされ、本国資本の論理からするホブソン・レーニ的な説明を、ほぼ拒否しているように見える。こうした帝国主義の現地主義的解釈とでもいうべき観点は、もとより本論文の独創とはいえないが、この時代のイギリス・インド関係をこの観点から明確に説明した研究は、従来、多くはないと思われる。今後の整理の仕方しだい、いっそうの理論的な展開も期待される。

個々の論点にも、ユニークな点がいくつも指摘できる。たとえば、第一部に展開されたヨーロッパ国際関係とインド

情勢が相関していることは、一般論としては当然予想されていたとはいえ、従来、その具体的な分析や叙述はほとんどなかった。とくに、イギリス・オランダ戦争のインドにとっての意味を解明したことは、本論文の大きな功績のひとつである。同戦争については、ヨーロッパ史にかんしても研究が乏しいだけに、これによって近世ヨーロッパ史上の国際関係の分析にも、新たな視野が開けるものと期待される。自由商人と東インド会社との関係を、ヨーロッパ国際関係の視角からとらえなおした点も、あらたな論点として評価できるであろう。

むろん、本論文にも、さらに検討ないし改善を期待すべき部分がないわけではない。理論面では、たとえば、本論文では「重商主義」という用語を意識的に避けているように見えるが、そのことがより明示的に語られておれば、資本範疇論の否定がさらに説得力をもつものと思われる。「ジェントルマン資本主義」論や世界システム論に対する姿勢にも、やや不透明な部分が残っているとすれば、この点も、理論だけを独立に議論するような章を設定することで改善されるであろう。また、事実関係では、ネイボップ批判の根拠との対比で、産業資本家や西インド諸島プランターに対するイギリス人一般の否定的姿勢の原因には触れられているが、そうであるなら、ネイボップに先行して、非難から称賛へという、ほとんど同様の評価の激変を経験した「マニド・メン」についての言及もあれば、18世紀イギリスの心性史のなかでのネイボップ批判の位置が、いっそう鮮明になったかも知れない。とくに、文章表現にも十全な配慮をしつつ、これらの点に踏み込んでおれば、論文全体の論旨がより明確になったものと思われる。

とはいえ、このような欠陥は、本論文の画期的な内容をそこなうものではなく、いわゆる「戦後史学」の呪縛から自由な、近世イギリス・インド関係の総合的研究として、本論文が果たす役割はきわめて大きいと思われる。したがって、本審査委員会は、本論文が、博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有する、と認定するものである。